

コロナ禍でのイドゥル・フィトリ

イスラム教徒にとってイドゥル・フィトリ(断食明けの大祭)は非常に重要です。特に地方では、人々が一か所のモスクや広場に集まり、交流の場となっています。お風呂に入って沐浴をし、新しい服を着て、香水をつけ、イドゥル・フィトリの会場へと向かいます。そして説教を聞いたのち、“Mohon Maaf Lahir dan Batin.(モホン マアフ ラヒル ダン バティン/今までの私の様々な過ちを許して下さい。”と挨拶を交わしあいます。

毎日の断食を一緒に過ごし、断食明けを一緒に迎える文化のあるインドネシアですが、コロナウィルスの感染拡大防止策として、政府は今年のアイドゥル・フィトリにジャカルタ首都圏から地方への帰省を全国民に禁止しました。この方針により地方からの出稼ぎ労働者は今回のレバラン休暇の際に、帰省することができませんでした。コロナウィルスの影響はジャカルタ出身の労働者だけではなく、地方出身の出稼ぎ労働者にも当然及んでいるのです。本来家族と過ごす年に一度のアイドゥル・フィトリを一人で過ごすことを強いられ、故郷への恋しさを募らせているようです。

また本来であれば、家族が集まって過ごし、多くの人の財布の紐が緩むイドゥル・フィトリですが、先行きが見えない今年は例年とは異なり、人々は出費に少し慎重になっているようです。去年は広場で大々的に祈りをする人々でにぎわっていた各地の都市も閑散とし、例年であれば爆竹を鳴らしイドゥル・フィトリを祝うなど非常ににぎやかですが、今年は公衆の場には集まらず、インドネシアの人々も各家庭で静かに過ごしています。

大規模な社会制限が発表された当初は、多くの人にショックを与え、否定的な意見も多くみられましたが、“仕方がない”という気持ちで、今年は例年とは違う形で工夫してイドゥル・フィトリを祝っています。例えば、イドゥル・フィトリに直接家族や知人を訪れ、挨拶や握手を交わすことができないため、今年は、ビデオコールやスカイプを使ってお祝いの言葉を送る新しい試みがみられています。また通常は断食明けに帰省をした際、直接プレゼントを渡したり、一緒に買いに行ったりするのですが、今年は相手のことを考えて選んだプレゼントを郵送しています。例年であれば食べ物を贈るところですが、今年はコロナのことを考え、相手にあった服をプレゼントするケースが多いようです。服を選ぶ際も、いつもは一緒にモールや市場に買いに行きますが、今年はそういった光景は少ないようです。

日本同様、インドネシアでもコロナウィルスは中小企業や個人事業主の経済を圧迫していますがそんな中少しでも、巻き返しを図ろうと、この状況下にあった贈り物のセット(通常服と礼拝用の服のセット)を売り出すなど、独自のサービスを始める企業も現れています。例えば、男性の場合、私服とサルン(腰布)、バジュ・ココ(礼拝用の襟のない服)とマスクのセット、女性の場合、新しい服とムクナ(女性が礼拝時に頭からかぶる布)とマスクのセットです。

インドネシアでもコロナウィルスの感染拡大によって、困難を強いられており、社会生活に大きな変化がもたらされています。今回できた新たな習慣がコロナウィルス終息後にも、継続されていくのかどうか、人々の生活習慣や意識にどのような変化がもたらされるのかは分かりませんが、コロナウィルスがこれ以上拡大することなく、一日でも早く終息することが願われます。

以上

★岡山県インドネシアビジネスサポートデスク (PT. JC内) 概要★

所在地 : Rukan Tanjung Mas Raya Blok B-1 No. 46

Jl. Raya Lenteng Agung, Tanjung Barat, Jagakarsa,

Jakarta Selatan 12530 INDONESIA

デスク担当者 : PT.JC 武井 和宏 (たけい かずひろ)

対象エリア : インドネシア全域

※「岡山県インドネシアビジネスサポートデスク」では、岡山県内に事業所を有する企業や経済団体等のインドネシアでの事業展開を支援しています(岡山県から公益社団法人 日本インドネシア経済協力事業協会に業務を委託)。ご利用に当たっては、「岡山県インドネシアビジネスサポートデスク」利用の手引きをご覧のうえ、岡山県産業企画課マーケティング推進室(電話 086-226-7365)までご相談ください。

※本レポートは岡山県内企業のインドネシアでの事業展開の一助とするため作成されたものであり、サポート対象に該当しない個別のお問い合わせには対応しておりません。